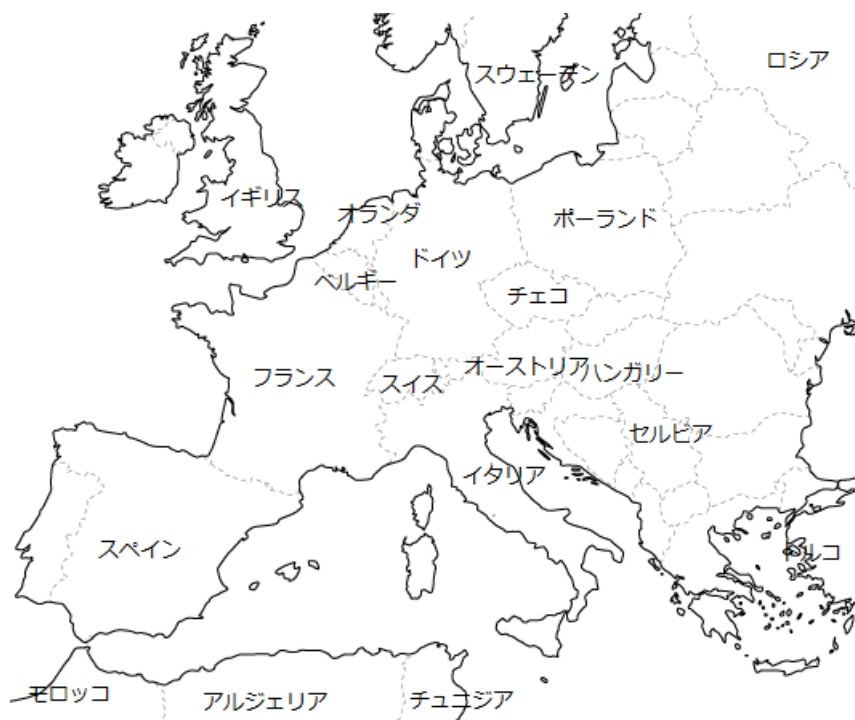


## ドイツの言語と文化 第8回 文化パート5：ドイツ史の概略

授業の文化パートでは、ヴァイマル共和国（1919年～1933年）の政治史を主に扱っている。この回では、高校の世界史の復習を中心に、それ以外の時代のドイツ史のダイジェストを見ていこう。

\* ドイツの通史としては、木村靖二編『ドイツ史』（山川出版社、2001年）などがある。ほか、高校の各社『世界史 B』教科書が、最低限の知識を効率よくまとめてくれている。



### 1. 古代

現在のドイツにあたる地域には、もともとケルト人が居住していた。そこに、もともとスカンディナヴィア半島に住んでいたゲルマン人が侵入してきて、ケルト人を駆逐していく（紀元前500年～200年ころ）。一方、ローマ帝国もドイツ地域に進出し、ライン川とドナウ川を国境としてゲルマン人と対峙した。

\* タキトゥス『ゲルマニア』（泉井久之助訳の岩波文庫で読める）。

\*\* トイトブルクの森の戦い（9年）→ハインリヒ・フォン・クライスト『ヘルマンの戦い』（1821年、佐藤恵三訳、沖積社の『クライスト全集』で読める）。

ゲルマン人の社会は、王、貴族、平民、奴隷などの身分に分かれていたが、王を中心に貴族

<sup>1</sup> 白地図は <http://www.freemap.jp/item/europe/europe.html> より。

や平民も出席する**民会**が行われ、これが議会の起源の一つと考えられている。

## 2. 民族移動

4世紀、フン族の圧力を受け、ゲルマン人は**民族移動**を開始した。その間、ローマ帝国は東西に分裂し、西ローマ帝国は滅亡している(5C)。各民族の動向は以下の通り。

- ・西ゴート族: スペインへ (西ゴート王国)
- ・東ゴート族: イタリアへ (東ゴート王国)
- ・ヴァンダル族: 北アフリカへ (ヴァンダル王国)
- ・アングル族、ザクセン族: ブリテン島へ (アングロ・サクソン七王国)
- ・**フランク族**: 北フランス、ベルギーへ (フランク王国)

## 3. フランク王国

このうち、パリを首都とした**フランク王国**(5Cにメロヴィング家のクローヴィスが建国、すぐに**カトリック**に改宗)が有力となり、徐々にドイツも領土としていった。

\* ルネ・ミュソ＝グラール『クローヴィス』加納修訳、白水社、文庫クセジュ、2000年。  
やがて、宮宰を世襲していた**カロリング家**が有力となり、下剋上により王位を奪った(751年)。**カール大帝**(Karl I.)は西ヨーロッパの大部分を統一し(現在のフランス、ベネルクス三国、ドイツなど)、ローマ教皇によって西ローマ皇帝として**戴冠**された(800年)。

フランク王国は、カールの子孫によって分割され、ドイツにあたる部分は**東フランク王国**となった(843年のヴェルダン条約、870年のメルセン条約)。ドイツでは、カロリング家の断絶後はザクセン家が王位を継承し、マジャール人の撃退などに功があったオットー1世(Otto I.)は、カールに続いてローマ教皇の手で戴冠された(962年、**神聖ローマ帝国**)。

\* カトリック信仰とドイツ人の主導する神聖ローマ帝国の秩序によって東方の諸民族から守られる西ヨーロッパは、「**夕べの国**(Abendland)」として理想化されていく。

\*\* 「神聖ローマ帝国」は、当初は単に「ローマ帝国(Imperium Romanum)」と呼ばれており、のちに「神聖な(sacrum)」や「ドイツ人の(Germaniae)」が付された。

## 4. 神聖ローマ帝国

神聖ローマ帝国は、「ローマ帝国」であったので、イタリアに進出しようとしてきたが(イタリア政策)、必ずしも成功せず、事実上ドイツ人地域(ドイツ+オーストリア+ベーメンなど)の国家となった。

\* ベーメン(ボヘミア)は現在のチェコ西部で、すでにスラヴ系のチェコ人が居住していたが、ドイツ人入植者も多く、神聖ローマ国内とされた。

神聖ローマ帝国の皇帝位は選挙制であったが、ザクセン朝(10C~11C)、ザリエル朝(11C~12C)、ホーエンシュタウフェン朝(12C~13C、このとき**十字軍**)と事実上の世襲王朝が続いた。このあと、大空位時代(13C)や選挙ごとに異なった家から皇帝が選出される時代

(13C~15C) を経て、オーストリアのハプスブルク朝の世襲となった (15C~18C)。

神聖ローマ帝国の社会は、国家以前のゲルマン人の主従関係を起源とする**封建制度**であった。王 (=皇帝)、**諸侯** (Fürst)、**騎士** (Ritter) がそれぞれ、主君が臣下に封土 (Lehen) を与え、臣下が軍役を負担する関係を結んだ。次第に有力な諸侯は王に対して自立性を持つようになっていく。一方、平民の経済活動から定期市が生まれ、そこを基盤に都市が発生した。都市のなかには、王や皇帝から自治権を与えられ**自治都市**となるものもあった。

\* 現在のドイツでは、ハンブルクやブレーメンは都市がそのまま州となっている。これは自治都市の名残である。

## 5. 金印勅書と領邦の成立



<sup>2</sup> 白地図は <http://www.freemap.jp/item/europe/germany.html> より。太字は7選帝侯。ただし、国境、州境は現在のもの。

14世紀には、神聖ローマ帝国内の諸侯や自治都市が300ほど散在するようになっていた。これらは、国家内の国家として**領邦** (Land) と呼ばれる。

そのなかで、皇帝カール4世 (Karl IV.) は**金印勅書** (1356年) を発布し、有力な領邦7つ (以下の通り) に皇帝選挙権を限定 (**選帝侯**) した。かくして領邦分立が事実上確定した。

- ・ケルン大司教
- ・マインツ大司教
- ・トリアー大司教
- ・ブランデンブルク辺境伯領…のちプロイセン公国と合併、**プロイセン王国**となる。
  - \* プロイセンは、バルト海沿岸の**ドイツ騎士団領**が起源。12C~14C、ドイツ人による**東方植民**が行われ、騎士団領が成立していた。
- ・ベーメン (ボヘミア) 王国…当初はルクセンブルク家だったが、のち**オーストリア大公国**の**ハプスブルク家**が継承する。
- ・プファルツ伯領…ヴィッテルスバッハ家。のちバイエルン公国と合併し、**バイエルン王国**となる。
- ・ザクセン公国…ヴェッティン家。のちの**ザクセン王国**。

## 6. 宗教改革

16世紀、カトリック教会の権力に対する反発が広まり、**マルティン・ルター** (Martin Luther) らの**宗教改革**の動きが生まれた。ルター派などは**新教徒**もしくは**プロテスタント** (Protestant=抗議者) と呼ばれる (カトリックは**旧教徒**)。ルター派の主張は以下の通り。

- ・カトリック教会の国際的位階制の否定
- ・福音 (=聖書) 信仰
- ・ドイツ語による聖書翻訳
  - \* ヨハネス・グーテンベルク (Johannes Gutenberg) による印刷術の発明がルター訳聖書の普及を促進した。聖書翻訳については、田川建三『書物としての新約聖書』(勁草書房、1997年) を参照。

皇帝 (カール5世、Karl V.) との対立や諸侯同士の宗教戦争のあと、アウグスブルクの和議により、諸侯は自由に信仰を選べるが領民はそれに従わねばならない (**Cuius regio eius religio**) ことになった。これをもって、各領邦の宗教的分裂が進展する。オーストリアやバイエルンはカトリック、プロイセンはプロテスタントを選んだ。

## 7. 三十年戦争

オーストリア (旧教国) 領ベーメンの新教徒の反乱を契機に**三十年戦争** (1618年~1648年) が起こり、ヨーロッパ各国を巻き込んで国際戦争となった。

- ・旧教側: 神聖ローマ皇帝 (=オーストリア)、バイエルン、スペインなど
- ・新教側: プロイセン、ザクセン、オランダ、スウェーデン、フランス (旧教国) など

1648年、**ヴェストファーレン条約**で講和が成立した。その内容は、

- ・神聖ローマ皇帝や教皇の特別な権限が認められなくなり、各**主権国家**が対等となる (ヴェストファーレン体制、ウェストファリア体制)
  - ・ドイツの場合でも、各領邦に完全な主権が認められ、ドイツの分裂は決定的となる
  - ・エルザス (アルザス) はフランス領に
- \* フリードリヒ・シラー『三十年戦史』は渡辺格司訳の岩波文庫で読める。

## 8. オーストリアとプロイセンの発展

オーストリア大公家は、依然として神聖ローマ皇帝位を持っていたが、三十年戦争以降はオーストリアの統治に専念した。すでにハンガリー (16C~) を合併していたこともあり、神聖ローマ帝国の内外に巨大な領土を形成した。

プロイセンは、やはり三十年戦争以降に急速に発展し、いち早く**常備軍**や**官僚制**を整備して王権を強化した。その際、地主貴族の**ユンカー** (Junker) が軍人や官僚を輩出して王権の基盤となる。18世紀には、フリードリヒ2世 (Friedrich II.、**啓蒙専制君主**の典型とされる) の統治下、オーストリアからシュレージエンを獲得 (オーストリア継承戦争、七年戦争) し、さらにオーストリアやロシアと組んでポーランド分割に参加し、やはり神聖ローマ帝国の内外に巨大な領土を形成した。

ナポレオン戦争 (1803年~1815年) では、オーストリアやプロイセンも被害を受けたが、ドイツ人の国民意識が向上し、軍や行政の近代化も図られた (徴兵制による国民軍など)。

- \* フランス軍占領下で行われた講演、ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』は大津康訳の岩波文庫で読める。

ナポレオン戦争の結果、皇帝による神聖ローマ帝国解散宣言が行われ、これ以降のオーストリアは単に**オーストリア帝国**となった。

## 9. ドイツ統一へ

ナポレオン戦争の戦後処理を話し合うヴィーン会議 (1815年) の結果、旧神聖ローマ帝国の範囲に**ドイツ連邦** (Deutscher Bund) が成立し、オーストリアが盟主となった (オーストリアとプロイセンはドイツ連邦の外にも領土がある状態)。ただし、単に複数の国家の連合であり (国家連合)、連邦国家ではなかった。

フランス革命 (1793年) とナポレオン戦争の結果、ドイツでも国民意識が台頭し、統一されたドイツを求める民族運動が生じていった。1848年から49年にかけて、フランスの**二月革命** (1848年) がドイツにも飛び火し、ドイツ統一と全国憲法制定のため、自由主義者らが**フランクフルト国民議会**を開催してプロイセンを中心とするドイツ統一を議決したが、革命家の手で戴冠されるのを嫌ったプロイセン王 (フリードリヒ・ヴィルヘルム4世、Friedrich Wilhelm IV.) に断られて失敗した。

- \* フランクフルト国民議会の争点は**大ドイツ主義** (オーストリアのドイツ人地域を含

んで統一する)か**小ドイツ主義**(オーストリアを排除してプロイセン中心で統一する)かであった。ここでは、小ドイツ主義が勝利している。

その後、統一運動の主体は、自由主義者からプロイセン政府と軍部へと移る。その際、ユンカー出身の**オットー・フォン・ビスマルク**(Otto von Bismarck)が**宰相**(Kanzler)として主導的役割を果たす。主な経過は次の通り。

- ・1864年: シュレスヴィヒ・ホルシュタイン戦争、デンマークからこの2州を奪う
- ・1866年: 普墺戦争、オーストリアを破ってドイツ連邦を解体
- ・1871年: 普仏戦争、フランスを破ってアルザス・ロレーヌを獲得

普仏戦争で占領したパリ近郊のヴェルサイユ宮殿で、プロイセン王はドイツ皇帝として戴冠(ヴィルヘルム1世)、**ドイツ帝国**が成立した。なお、統一から排除されたオーストリアはマジャール人(ハンガリー人)に自治権を与え、**オーストリア・ハンガリー帝国**となる。

## 10. ドイツ帝国

**ドイツ帝国**(Deutsches Kaiserreich)は連邦制国家で、各領邦(プロイセン、バイエルン、ザクセン...usw.)をそのまま含んでいた。各領邦には君主がいて(自治都市以外)、独自に議会も持っていた。そのなかのプロイセン王がドイツ皇帝を兼ねることになった。

ドイツ帝国には帝国議会(Reichstag)があり、男子普通選挙が採用されたが、政府の各役職は皇帝が議会と無関係に任命したため、議会は無力であった。官僚や軍人の多くはユンカーで占められ、その長である宰相ビスマルクはなかば独裁的な権力を振るった。

\* ヴァイマル共和国以降の議会は完全普通選挙。なお、日本の男子普通選挙は1928年。

\*\* プロイセン王国の議会に関しては、納税額によって一票の重さが異なる制限選挙であった。

ビスマルク時代の内政は、カトリック(プロテスタント国であるプロイセンがドイツを統一したことに不満を持つ)や社会主義者を抑えることを主眼とした。前者については、**文化闘争**と呼ばれる弾圧政策(聖職者の政治活動禁止、公立学校からの追放など)が行われたが、カトリックは**中央党**を結成して対抗した。後者については、**社会主義者鎮圧法**(社会主義的な結社、集会、出版の禁止など)を制定し、**社会主義労働者党**(のちの**社会民主党**)を弾圧した。ただし、フェルディナント・ラッサールら一部の社会主義者と親しかったビスマルクは、社会保険など社会主義的政策を取り入れてもいる(国家社会主義、Staatssozialismus)。

ビスマルク時代の外交は、フランスの封じ込めとヨーロッパ多国間協調を主眼とした。1882年には北アフリカを植民地化したフランスに危機感を持つイタリアを誘って**三国同盟**(+オーストリア)を結成した。また、アジアやアフリカの植民地獲得にも参入している(**帝国主義**)。1884年から85年のベルリン会議ではヨーロッパ各国のアフリカ分割を調停し、東アフリカ(現タンザニア)と西南アフリカ(現ナミビア)を獲得した。同じころ、太平洋の島嶼部(現ミクロネシア、ニューギニアなど)もドイツ領となった。

\* ドイツのアフリカ植民地については、臼井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る』が

興味深い。

### 1.1. 第一次世界大戦

ビスマルクを失脚させて実権を握った皇帝ヴィルヘルム2世 (Wilhelm II.) は、多国間協調を積極的な帝国主義政策へと転換した (世界政策)。例えば、オスマン帝国と提携し、ベルリン、イスタンブール (ビザンティウム)、バグダードを結ぶ鉄道の建設 (3B 政策) を進め、イギリスの植民地政策に対抗しようとした。海軍力の増強も図っている (大洋艦隊)。モロッコではフランスと衝突した (モロッコ事件)。

サラエヴォ事件 (セルビア人青年がオーストリア皇太子を暗殺) で**第一次世界大戦**がはじまったとき、ヴィルヘルム2世治下のドイツはオーストリア側で参戦した (ほかオスマン帝国、ブルガリア)。戦争は予想外に長引き、**総力戦体制** (経済の再編成、女性の工場への動員、食料の配給) が確立したが、物資が窮乏し、結局は敗戦へといたる。

\* 総力戦については、エーリヒ・ルーデンドルフ『総力戦』(伊藤智央訳、原書房、2015年)、臼井隆一郎『アウシュヴィッツのコーヒー』(石風社、2016年) など参照。

### 1.2. ヴァイマル共和国

授業でメインとして扱っているので省略。

### 1.3. ナチス体制と第二次世界大戦

1933年、**アドルフ・ヒトラー**がパウル・フォン・ヒンデンブルク大統領により首相に任命され、**国民社会主義ドイツ労働者党** (ナチス、NSDAP) が政権に参加する。当初は国家人民党や保守系無所属との連立政権であったが、議会での議席は過半数には達せず、大統領の信任によって成立した内閣であった。しかし、国会議事堂放火事件での共産党弾圧、**授権法** (政府に立法権を与える) の制定、他政党の強制的解散、ヒンデンブルク死後の大統領権限吸収 (ここでヒトラーは総統、**Führer** と称する) により、すぐに独裁的権力を握る。また、反ユダヤ主義にもとづいてユダヤ人を弾圧し、第二次世界大戦中には強制収容所での絶滅政策を行った (**ホロコースト**、あるいは**ショアー**)。

NSDAP 政権は、国際連盟脱退 (1933年)、再軍備宣言 (1935年)、非武装地帯のラインラントへの進駐 (1935年) などを進め、ヴェルサイユ条約体制を破壊した。1938年にはオーストリア (第一次世界大戦後、ドイツ人地域だけの小共和国になっていた) を合邦、さらにチェコのドイツ人地域 (ズデーテン地方) の割譲を要求し、ミュンヘン会談で英仏伊に認められる (宥和政策)。しかし、それだけでは満足せず、ミュンヘン会談の合意に反してチェコスロヴァキアを解体し、ポーランド回廊 (飛び地となった東プロイセンと本国のあいだの領土) も要求したため、英仏は宥和政策を捨てた。これに対し、ドイツはソ連と組んで独ソ不可侵条約を締結する (1939年)。

その後すぐドイツはポーランド侵攻を開始するが、ここで英仏がドイツに宣戦布告、**第二**

**次世界大戦**となった。フランスを降伏させ、ソ連との戦争開始 (1941年) 後はモスクワに迫るなど、ドイツは緒戦を有利に進めたものの、アメリカの参戦 (1941年12月) やソ連の反撃 (1942年) 後は劣勢となり、ノルマンディー上陸作戦 (1944年) を経て、1945年に無条件降伏に追い込まれた。

#### 14. 戦後のドイツ

戦後、ドイツは、アメリカ、イギリス、フランス、ソ連の4国に分割占領され、**ニュールンベルク裁判**で戦争犯罪責任を追及された。国境線は現在のもの (オーダー・ナイセ線をポーランド国境とする) が定められる。1949年、ソ連占領地域で**ドイツ民主共和国** (Deutsche Demokratische Republik, DDR、東ドイツ、首都=ベルリン) が、それ以外で**ドイツ連邦共和国** (Bundesrepublik Deutschland、西ドイツ、首都=ボン) が発足し、**東西冷戦**にともなって国家が分断された。ただし、東ドイツ内部にあったベルリンのうち、さらに西半分は米英仏三国占領下のままとされた (西ベルリン)。やがて、東西ベルリンの境界にはベルリンの壁が建設された (1961年)。

東ドイツでは、ソ連の指導のもと (東側陣営)、**ドイツ社会主義統一党** (Sozialistische Einheitspartei Deutschlands, SED) が政権を握る。他政党 (衛星政党) も許可されたものの、政権交代のないヘゲモニー政党制であった。西ドイツに比べて経済発展は停滞する。

\* 社会主義統一党は、ソ連の指導により、共産党と社会民主党が合同してつくられた (ただし共産党系が主導権を握る)。

西ドイツでは、ヴァイマル共和国に引き続き、議会制民主主義が行われた。「社会国家」を標榜し、ある程度は社会主義的政策も取り入れられた。議会では**キリスト教民主同盟** (Christlich-Demokratische Union Deutschlands, CDU、中央党を前身とする) と**社会民主党** (SPD) が二大政党化し、前者からコンラート・アデーナウアー (Konrad Adenauer)、後者からヴィリー・ブランド (Willy Brandt) などが首相に就任した。ただし、議席配分は比例代表によるため (小党乱立を防ぐ 5%条項あり)、ほかにも民主党の流れを汲む自由民主党、1968年に高揚した学生運動により成立した緑の党などが存在した。

1980年代後半、ソ連のゴルバチョフ書記長の改革 (ペレストロイカ、グラスノスチ) が波及し、もともと西側と比較しての経済停滞や自由欠如に不満を持っていた東側陣営での改革要求が高まった。1989年、東ドイツ政府はベルリンの壁の開放に追い込まれる。1990年、東ドイツでは最初で最後の自由選挙が行われ、早期統一派が勝利したため、西ドイツによる東ドイツの吸収によって**ドイツ再統一**が行われた (ただし、首都はベルリンとされた)。

#### 連絡先など

講師のメールアドレス: tokan@nifty.com 講師のウェブサイト: <http://hhasegawa.la.coocan.jp/>

授業のサイト (配付資料あり): <http://hhasegawa.la.coocan.jp/lecture/2018/2018sitDeutscheSpracheundKultur.html>